

『東京五輪がもたらす危険』出版記念京都・市民放射能測定所シンポジウム(2020年2月11日 於:京都)

第2部6章 「政府の「被害なし」主張の根拠＝国連科学委員会(UNSCEAR)報告は信用できない」について

藤岡 毅

大阪経済法科大学21世紀社会総合研究センター客員教授
低線量被ばく問題研究会代表

1. UNSCEARの見解＝「国際合意の科学的知見」 というのは作られた「権威」である

- ①長瀧重信長崎大名誉教授 首相官邸の原子力災害専門家グループの重鎮
→ 「疫学的には、100mSv 以下の放射線の影響は認められない」というのが「サイエンス」、「100 mSv 以下でも影響があると仮定」するのが「ポリシー」だとUNSCEAR報告に依拠して主張
 - ② 「低線量被ばくのリスク管理に関するワーキンググループ」
→ 「100 mSv以下」では「他の要因」によって「隠れてしまうほど小さい」という見解が、「国際合意の科学的知見」であるとその報告で結論づけ
 - ③ 原発賠償裁判での政府側専門家証人の意見書
→ 「(UNSCEARの)報告書に引用」されることが「定説の定着」への「一過程」だ
- ★そもそも100mSvが生涯線量であることを曖昧にし、UNSCEARの「権威」を悪用した「安全論」は原発被害者切り捨て政策の道具となった

2. 「国際合意」を強調する「UNSCEAR2013年報告」は そもそも日本政府・専門家による「自作自演」だ

- ①2013年報告作成に日本政府(外務省)から約7000万円の資金が投入されており、2017年改訂版にも新たに7000万円投入されている
- ②報告書作成時(2013年度)のUNSCEAR報告者は日本代表(米倉義晴・放医研理事長)
 - 2014年度 → UNSCEAR副議長 (日本代表)
 - 2015～2017年 → UNSCEAR議長 (日本代表)
- ③UNSCEAR2013報告の基礎データの大部分は放医研など日本の研究機関が提供したものの

3. UNSCEARは「ピア・レビュー」に支えられた学術組織ではない

- ①元WHO放射線・公衆衛生顧問キース・ベーヴァーストック氏の批判
→ 「UNSCEAR福島報告書は、時宜にかなっておらず、透明性に欠け、包括的でなく、利権から独立しておらず、**したがって、『科学的』と呼ばれるに値しない**」

- ②UNSCEAR自身が語る統治原理(Governing Principles)
→ 「委員会の科学的評価の主題は・・・**政治的に課された問題の論争的な議論と密接に関係**する場合がある」

- ③UNSCEAR2016年白書での**津田論文**に対する「**非科学的な**」扱い
→ 津田論文への批判的レターのみを取り上げ、津田の反論は無視

4. UNSCEARは原子力を推進する各国政府の意向を反映した組織となった歴史的経緯(1)

①1954年3月、ビキニ岩礁で米国水爆実験

→ フォールアウトのリスクをめぐる**米国原子力委員会(閾値なし)**と**遺伝学者・科学者(LNT仮説)の対立**。状況は硬直化へ

②1955年3月、硬直化した状況を打破するために米国連邦科学者連盟(FAS)は英米ソの科学者からなる国連内の委員会の設立を提案

→ 当初、**英米両政府は拒否**

③ラッセル・アインシュタイン宣言(1955年7月)等の核実験禁止・核兵器廃絶の国際世論の沸騰

→ 核実験反対の科学者や国際世論が**ソ連と戦略的に繋がり始めた状況への米国の危機感**

→ **孤立を深める米国の戦術転換** (米国自身がスポンサーになって国連に科学委員会を設け、国連加盟国に提出された**科学データ**と**出版物**を米国の管理下に置く)

4. UNSCEARは原子力を推進する各国政府の意向を反映した組織となった歴史的経緯(2)

④1955年12月、国連総会でUNSCEAR設置決定

- ・FASの原案のままだと

- 国連事務総長による科学者の任命、委員会は科学者の自治を実現した可能性あり

- ・実現した米国案では

- 加盟国政府が専門家を公式の代表に選ぶ方式を採用。こうして原子力を推進する各国政府の意向を反映する体制が生まれた。(初期の15加盟国は、米、英、日、カナダ、仏、ベルギー、スウェーデン、オーストラリア、メキシコ、アルゼンチン、ブラジル、インド、ソ連、チェコスロバキア、エジプト)

⑤1958年8月、核実験一方的停止を背景にソ連政府はUNSCEARで核実験の全面禁止を提案

- ソ連の提案は英米を中心とするICRP主導国の放射線リスク論を過小評価とみなし、より高いリスクへの懸念を背景としたものであったが、ICRP主導国の反対によって否決された。以来UNSCEARはICRPと歩調を合わせ、核実験再開後ソ連もその枠組みに収まらざるをえなかった。